

---

# 僕の好きなひと

森 あきら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の好きなひと

### 【コード】

N0677C

### 【作者名】

森 あきら

### 【あらすじ】

僕の好きな人の恋の話。明日は晴れるといいんだけど、ね・・・。

## 第1話

僕と君が始めて出会ったのは去年の六月。

梅雨の中休みで、気持ちが悪いぐらい暑かった日。

その日の僕は予備校でぼんやりしていた。

英文法の質問をしてみたらし少しはスッキリするかと思いい講師を呼んでみたが、彼のぼさつとした説明は頭に入ってこない。

「はあ、わかりました。」

僕は生返事で講師を机の前から追い出した。

僕は自分を諦めた。

こんな日はもうぼんやりするしかない。

そう決めた途端、なぜか無性に甘いものが食べたくなくなった。

昼飯に食べたチキン南蛮弁当のせいかもしれない。

異常に塩辛い味付けだったが、貧乏で腹ペコの僕に食物を残すという選択肢はないので、完食した。

普段僕は甘い物をとらない。だから家に帰っても甘い食べ物は何もない。

焼きそばを炒めるぐらいしかしない僕の家には砂糖すらない。

駅のコンビニでチョコレートかプリンを買おうかと思ったけどやめた。

せっかく甘い物が食べたいチャンスに恵まれたんだ。今日は奮発してケーキを買って帰ろう。

僕は田舎の専門学校を卒業した後、もう一度四年制大学に入るため上京してきて二浪している。

さすがに、今年は落とすわけにはいかない。

僕は家の近くの駅ビルに入っているケーキ屋で買うことにした。色々な店が入っているので、選び甲斐があると思ったからだ。

だが、三軒目のショーケースを覗いた時に失敗した事に気づく。

種類が多すぎてとてもじゃないが選べない。

しかも蒸し暑い平日の午後にケーキを物色している客は少なく、男一人で何分も店の前をうろつくのはなぜか気まずい。

「いらつしゃいませえ。」

と、気のない店員の呼び込みの声も邪魔だ。

一通りビルに入ったケーキ屋を一周したが何も決まらなかった。

目星すらつけていない。

僕は自分の優柔不断さと居心地の悪さで嫌な気分になってきた。ケーキ一つでこんなに憂鬱になるとは……。

他のデパートに行こうかと思つたがどつと重い街をうろつきたくなかつたし、行つたとしても結果は同じだろう。

僕は仕方なく自分に言い聞かせた。

一番出口に近い店のケーキの中から選ぶ。もしそこで買うことが出来なければ、コンビニ。

意気地なしは板チョコの刑だ。

出口が一番近い店の名はフレッシュフルーツケーキ アットホーム・ママ

なるほど、どのケーキもフルーツがたっぷり使われている。わりと大きめで派手な感じだ。

「いらつしゃいませ。」

僕は服を買う時も、CDを買う時も、本を買う時も、ハンバーガーを買う時も、店員の目は見ないし、会話もしない。嫌な客と思われなくても構わない。こつちだつて嫌な店員だと思つてやる。うるさくて不適切なアドバイスしか出来ないくせに、やたら自分のセンスがいい事をアピールしたがる。

そんな奴は猿と同様だ。目を合わせちゃ、駄目だ。

でもその日は違った。

チキン南蛮弁当に塩以外の何かが入っていたのだろう。

僕はその日、チキン南蛮以外に有害なものを摂取していない。

「どれが一番人気ですか？」

しばらくケーキを睨んでいた僕は、気がつくやと店員に話しかけていた。

店員は僕と同じ年ぐらいだろうか。

顔のパーツがきちんと整っていて可愛いというよりは美人だ。

大きいアーモンド形の目、鷲鼻気味の高い鼻、柔らかさそうではあるが肉のあまりついていない頬、小さめだが形の良い肉厚の唇“アットホーム・ママ”のわりには親しみやすい顔ではない。

この店員というのはそう、君のことだ。

君は大きい瞳を僕にぶつけてきて、沈黙した。

僕は話しかけたことを一瞬後悔したが、君の沈黙が解けると僕がいつも嫌っている様な店員じゃないことがすぐにわかった。

「人気・・・なのは一年を通してショートケーキです。」

今の時期は売上が全体的に落ちますけど、トータルすると夏でも一番売れているのはやっぱりショートです。でも今は苺の季節じゃないので・・・お勧めはしません。あつ、私としてはです。」

僕は君が「ケーキです。」と、事務的に言うものだと思っていた。

「じゃあそれで。」と言うつもりだった僕は、面食らってしまった。

「じゃあそれで。」とは言えない一言を君が添えたからだ。

僕はますます悩んでしまったが、お勧めできないケーキを僕が買うのを阻止してくれた君に好感を持った。

しかし、ここでケーキを選ばなければいけないプレッシャーからはまだ開放されていない。

ショーケースをもう一度見渡す。

涼しそうなスイカとゼリーの入ったカップに目が止まった。ケーキじゃないが、この際もうなんでもいい。

「スイカはそろそろ旬ですよね？」

僕は少しドキドキしながら尋ねた。君はちょっと困った顔をして口を開く。

「はい、そろそろです。なので、まだ、今だと温室スイカです。」

・・・このカップの三分の二にはゼリーが入っているだけで上のスイカは大きく見えますけど値段の割には入っていないというか、少なめです。もしスイカが食べたいなら、もう少ししてからスーパーで買った方が安くておいしいかもしれません。いえっ、もちろん今スイカが食べたいのならこのスイカはお勧めです。温室スイカ、甘いですよ。」

君は遠慮がちに、でもはつきりと、そこまで食べたいわけじゃないならスイカはやめると店員とは思えない発言をした。僕はそこまでスイカが食べたいわけじゃなかったから、スイカを買うことはできない。

「じゃあ・・・何かお姉さんのお勧めはありますか？」  
もうこう聞くしかなかった。

「私の、個人的なお勧めでいいんですか？」  
僕も君もちよつとずつ笑顔になつていった。

「じゃあ、アップルパイです。りんごも旬じゃないですけど、甘く煮てるから私には季節での味の違いがわかりません。ちなみに工場で焼いているので焼きたてではないです。でもこのケーキの中では一番おいしいですよ。」

アップルパイなんかあつたかな・・・僕はアップルパイを探した。あつた。

一番端っこだ。他のケーキはフルーツやクリーム、ゼリー等で華やかにデコレーションされているが、君のお勧めのアップルパイだけは堂々と地味だった。

「じゃあそれ、一つ下さい。」

「ありがとうございます。」

君は微笑んだ。

いや、笑った。

綺麗な顔が一瞬にして溶けて、“アットホーム・ママ”の代表選手みたいな笑顔だった。

この時、僕の心も一緒に笑った。

僕は一つじゃ悪いかな、とも思ったが二つはいらなかった。

あまりにも君が正直だから、僕も正直に必要な分だけ頼んだ。

君は笑顔でアップルパイを箱に包みながら僕に話しかける。

「地下にある焼き鳥屋のレバーはもっとお勧めですよ。おいしくて安いです。砂肝と軟骨もいいですけどやっぱりレバーです。」

これが僕と君の出会いだった。

その後、僕は会計を済ませるとエレベータで地下へ降りて焼き鳥屋のレバーと砂肝と悩んだけれど、軟骨も買った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0677c/>

---

僕の好きなひと

2010年10月15日23時17分発行